

Nami-Aru? / Internet

「スポーツマン・サーファー」

文：ジョージ・カックル

ひさしぶりにサンフランシスコに来たので、昔よく行っていた「WISE」というサーフショップに寄ってみた。俺が住んでいた十五年前は、「WISE」1軒しかサーフショップはなかった。相変わらずスタッフはかわっていなかった。もちろんオーナー、店長と何人かのスタッフ、みんな昔の仲間。なんかいい気分だった。

そのとき、ちょうどNEW ZEALAND からきたサーファーが板を買いにきていた。その男が店から出ていくとき、ひと言店長に言った。「もし海のなかで会っても怒鳴らないで」ってね。彼は、サンフランシスコに来たばかりだから、そう言ったのだと思うけど、店長はこんな風に答えた。「ここではそういうことはしないよ」。その答えを聞いて、俺は、ああ、まだサンフランシスコは変わってないなと思った……。

彼らとの昔話のなかでいろんな面白いことを聞いた。ひとつは、サーファーが増えてサーフショップが多くなったということ。「きっとウェットスーツの素材が良くなって、長く入っていただけるからだ」と、笑って言っていた。でも、本当の理由は、いろんなメディアにサーフィンが取り上げられて、サーフィンが流行っているかららしい。しかも、昔みたいな遊び感覚ではなくて、なんか真剣なスポーツになってしまったみたいなんだよね（笑い）。

俺たちにとって、サーフィンがスポーツじゃなかった。好きな遊びだった。だから、誰がどんな波に乗ったか、どんな大きな波に乗ったかなんか、あんまり関係なかったような気がする。海に入れば同じ仲間だった、同じサーファー。波にまかれてサーフボードを流したら、笑いながら泳いで上がった。何にも証明する必要がなかった。

ある日、友達ふたり、JORDONとMARKと一緒に入ったときのことを思い出す。波はダブルぐらいであんまり大きくはなかったけど、風の向きが悪くて、うねりの感覚が近過ぎた。三人で30分ぐらいがんばったけど、ある波にまかれたあと、JORDONがこう言った、「I Don't Need This Shit!」そして、サーフボードを岸に向け、あがってしまった。俺とMARKは、もう少しパドルを続けたが、全然進めなかった。ある瞬間、目が合ったんだ。笑いながら二人で同じことを考えていたんだ、「あいつは正しかった」と。そして、サーフボードの向きを変えて、俺たちもあがった。純粹に楽しくなかったんだよね。

話によると、今はスポーツマン・サーファーが多くて、笑い顔が少なくなったと言う。お願いだ、サーフィンをスポーツにしないでくれ……。